
carom

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

carom

【著者名】

N1351D

【作者名】

冴島岐之

【あらすじ】

シリーズ『高校の軽音部』caromのメンバーの日常を、淡々と綴ります。

「外れないでよ」

「わりイ、もつかい頼む」

毎月、第三日曜日はスタジオを借りてライブをやるつけて決まつてゐる。この三月も例外なく、明日の十八日にちゃんと予約してあつた。

今月はみんなそれぞれ忙しくて、五人全員が集まつて会わせるのにはこの前日しかない、なんて、なんだか危機感の感じる状況。新しい曲だって入れたし、久々にラストを演じられることになつたから、みんないつもよりかなり必死になつてゐる。

それなのに、あの男はまた同じところでコードを外す。そろそろ怒りの限界だ、と思つ。

「まあまあ、カヅキ、そう怒んなつて」

中尾雄亮が間に入つて私を宥めようとする。目の前で落ち着くようについて手でジェスチャー。顔には苦笑い。御機嫌取りのポーズ。そんなんでこの怒りが消えるんなら苦労しねーよ、といふ意味を込めて

「チツ」と舌打ちをした。

それからまたユースケを通してあいつを睨みつけながら、握ったマイクをどうやって頭に投げつけてやろうかって考えていた。

「腑抜け。ヤル氣ないんだつたらいらぬから」

「うん、わりイ……」

ムカツク。いつ見ても話せ。口に出す前に一回、顔を大きく歪ませて睨むのが私が怒るときの癖だ。本日も例外なく、眉間に皺がよつた。口は真一文字に閉じている。

あいは、いつも前のめりになつてギターを弾く。横田で見ながら、いつかそのまま前転でもするんじゃないかつて思ひへり、夢中になつてギターを弾いている。

なのに今は、申し訳程度に首からストラップをかけて、手を添えただけみたいに頼りなくギターを持つて、明らかに落ち込みから背中がかくつと曲がつてゐる。情けない。かつこわりイ。

そんなの、あいつらじへない。

「なんなのあんた、そんなにギター楽しくないわけ？ それともこんなことやってんのバカらしくなつちやつた？ どうしてその態度、マジムカツクんですけど。あんたが誰にフランクが裏切られようが、こつちは知つたこつちやないんだよね。その雰囲気、ここに持ち込まないでくれない？」

うつかりでもなんでもなく、ズバズバといつもの調子で口を滑らす。いつもだつたらあいつに『かわいくねえ』って毒づかれるところ。でも今日は、

「なにみ

「あー、あー、俺が悪つゴザイマシタッ！ 帰るわ！」

「はあ？ 何それ

「だつて俺がいないほうがいいだろ、じゃーな」

驚くほど速さで帰り支度をして、あいつはスタジオから出て行つた。アリエナイ。マジでアリエナイ。あいつホント、イかれちやつたんじゃねえの？

乱暴に閉められた扉の内側で、沈黙が広がる。

「カーヴキィ、マサト怒っちゃつたじゃんか

「私のせいだつていいたいの、シュン

ドラムの賀庄峻一が、手にしたスティックをぐるぐると回しながら、不満そうに口を尖らせた。こいつはとかく軽い。ペラペラペラペラ喋る。いうなといつた話を誰にも喋らないでいたれた試しがない。もちろん女の子に対してもそんな感じらしい。できたらこんな知り合いは欲しくない。

「そういうわけじゃないけどさー、もひとつ言い方つてもんがあるんじやねーの？」

「は、言い方ね」

あたしゃあんたのその口も気に入らんよ。うるせーんだ。

シユンとは小学生の頃からの付き合いだ。幼馴染とは違うが、小中高と同じ学校に通う仲。それでも未だにこいつは、私の考えることってのがわかつていらないらしい。

「……じゃん、カヅキは間違つてないし。いつくれて俺はすつきりしてんぜ」

「ジュンタまで……まあ、確かにあいつもあいつだけじゃれ」

私とシウンが喋っている背後で、时任潤はアンプの前にしゃがみこんで手を動かしている。どうやらコードを外そうとしているらしい。

「ジュンタア？ 帰んのか」

「だつてこれじや今までの練習と変わりないだる。合わせらんないんじや意味ねーよ。カヅキ、お前も」

「コードから解放されたベースを持って余しながらゆっくり視線を私に向けてきた。カラーリコンタクトを入れてるジュンタの瞳は灰色をしてる。ロン毛とはいえないまでも、肩口まで伸びた漆黒の髪が、遠慮がちに揺れた。

「はやく、行くよ」

「…………うん」

またやつちつた。ジュンタを見ると、なんかもう全部を忘れちまう。ジュンタの全部が私を魅了して、魅惑して、感じ取る以外の全ての行為を忘れそうになる。へんな感じ。

「あらー、どうするコースケ。カヅキとジュンタはデーターじゃこよ」

「みたいだねー、シウン。つたぐ、ノンキだなー」

「なんなんじゃねーよ」

くくつとジュンタが渴いた笑いをこぼして、去り際に私の耳元で「いつものとこ」とだけささやいて出て行つた。背筋がぞくぞくとふるえる。敵わない、と思つ。

今日はほとんどの役目の中つたキーボードを片付けていると、うしろでシユンとコースケがまた喋つていた。

「なんでジュンタつてカヅキなんだろつ

「だよな。カヅキかわいくねーし、ジュンタは前みたいな年上のお姉様の方が似合つよなー」

「そつそつ、カヅキつて色氣の欠片もねーよな」

「……あんたらねえ」

普通本人の前でそういうこというか？ ホント、ここに彼らの感覚が掴めない。

「大体ジュンタは私のことなんて好きじゃないよ

私だって別に好きなわけじゃない。一方的に憧れてるだけなんだから。同じ年なのに、どうやつたらあんな落ち着いた雰囲気が出るんだろう。思つたことをすぐ口に出せないので、感情に振り回されないで。

私とは逆だ。人生を道に例えたら、物事に対する考え方や捉え方を方向で表すなら、私とジュンタはきっと正反対の方向を向いていいで。

るだらり、と思つ。

「じゃあ、明日ね」

「おー、最悪四人でだな」

ショーンはおもしろそうに笑つてゐけど、ユースケは私を睨んで手を振つていた。あいつが出て行つたのは、私のせいだといいたいのだろう。否定するわけじゃないけど。

* * *

薄暗い階段を上つて地上へ出る。まだ毎時だ。眩しさに目がちかちかして痛い。

『いつものところ』

そういうじゅんたは先に出で行つた。多分、スタバだろう。ジュンタは無類のコーヒー好きで、中でもスタバは一番のお気に入りらしいから。

駅前にあるスタバへ行くと、ジュンタはいつも通り窓際のテーブル席に座つていた。さつきまで見ていたその姿を見つけて、私は思わず固まつた。

あいつがいる。

私は咄嗟に帰ろうと決意した、が、そう思つて目を逸らすうとしたところで、ぱちりジュンタと目が合つ。

ジュンタは微笑んでいたけれど、灰色の目は笑つていなかつた。帰ろうとしたことがばれてしまつたようだ。

仕方なく、私は店内へ足を踏み入れる。なんか買つてからこいとジュンタにジェスチャーで示され、しぶしぶレジに並んだ。いつもと同じキャラメルマキアートを頼んで、ジュンタとマサトが待つ席へ近づく。

「カヅキ、ここ座つて」

そういうじゅんたは椅子を引いてくれた。

「ありがと」と小さくいって、カップを先にテーブルへ置く。それ

から背負いつぱなしだったキーボードを肩から外して、自分が座る椅子へ立てかけるようにして置いた。

「マサト、お前、モーたやつてくれたなあ

「……かもな

「そりそりこつてもここんじゅうねーの？」

イヤな無言がマサトを中心に生まれる。私は逃げ出したい気分になる。イヤだ。どうして私、ジュンタのいう通りにこんなところへ来たのだろう。やっぱりあのまま帰つておけばよかつたのだ。今せら遅い、だけどまた、マサトの失恋話聞かされるくらくなら。

「あ」

「あのれ、」

マサトがいいかけたといひで、私は遮るよつな大きな声を出した。

「いい加減、そんな話聞きたくねーし、イチイチくよくよされてちやたまんねーし、私、そういうのジュンタ達みたいに耐えらんねーんだよね。だからせ、」

ヤバイ、心臓がめりやめりやだ。つっこよ、静まれってんだ。
あー、音が聞こえない。

「明日で、も、止めていいかな」

「めん、頭の中で謝罪の言葉が響く。本当はいろんなこと理由にす

る気持ちなんてこれっぽっちもなかつた、でもそろそろ限界なんだ。

何が、そんなのわからない。だけど限界なのだ。

音楽、こいつらでやるバンドは、なんだかんだいって悪くない。むしろめちゃくちゃ良かった。

知らない大勢の人の前で唄うのが、気持ちよかつた。

だけど、自分がおかしくなりそうなんだ。

イライラして、だけど驚くくらいに高揚して、でも胸が痛くて。きっとスポットライトが私をおかしくしてる。歓声も拍手も聞こえない、ステージの上、ギターを握り鳴らすあの指が、飛び散る汗が、私をおかしくするから。

もう、見てられない。胸が痛い、その理由も、本当の本当は気付いているから。

「私いない方がみんな、やりやすい」と

確信も事実もここにある。何より、私は耐えられない。

「ま、マサトの話聞けよ、カヅキ」

そういうてジュンタは私の頭をなでた。

ジュンタはこういうことを自然に、誰にでもやるからいけない。干渉し過ぎないやさしさは心地よくて、無条件でドキドキさせられる、自分が女の子なのだと気付かせるような、守られているような、不思議な気分になる。

「……俺、」

マサトはいつもと全然違う、しおらじくなつて、伏し目がちになる。何かいぶかしく感じ、ジュンタの方を盗み見ると、私がそうするとわかつていたのかばつちりと目があつた。さらにもそこには、め

つたに見せないやわらかい笑顔を浮かべている。だからヤバいって。自分の中の女の子が簡単に顔を出してしまったから。

「 つ、ジユンタ」

「く、わあったよ」

ジユンタはまだ中身の入ったカップを手に持つて、私の方に手を置き

「カヅキ、明日ね」と歯を耳にくつつけようとして席から離れていった。

ああ、まだだ。

心臓は正直にその鼓動を速めてしまつ。

「……カヅキ？」

「なにや」

長いすがり短いすがりの茶髪。耳にあけたピアスが髪の間から見え隠れする。

軽音部で初めて会つて、もうすぐ一年になる。その間、いつだつてコイツの中にはあの女の子がいて、他の子からの告白だつて取り持つた。

意味が、わからない。マサトのビコが女の子にむてるんだどうつか。やつぱり、ギターを弾いているから？ バンドやつてるともてるつていづらしきけど。確かに、ウチのバンドの奴らは全員が彼女持ちつてわけじゃないけど、彼女が欲しくて悩んでるなんて聞いたことがない。

ああ、私も、彼氏がいたら何か変わるかな。なんか、惨めになつてくんだ。バンドを無くした私つて、さらによ。

「……スキ、なんだけど」

スキ、好きねえ。またマサトの恋愛相談でも聞かなきゃいけないのかね、私は。私は、誰かを好きになれるのかね。

ここで、このバンドで過ごしてきた以上に楽しいことなんて、あるのかね。

「ふーん、今度は誰よ」

「……お前、それ本気でいつてんの?」

「は?」

なんか聞き逃したかな、とじぱりく考えてみる。考えゴトはしていたが、話はきちんと聞いていたつもりだ。誰か、なんてマサトはいつてないし、誰かを指し示すようなこともしていない。私がいて、マサトがいて、『スキ、なんだけど』そういうた。でも、そんなのつて、

「何、私が好きだとでもやーの?」

まさかね。思いながら口に出してみる。

「それ以外何があんだよ」

「は?」

嘘だ、信じらんない。心底呆れた声が口から出る。

私は自慢じやないが、今まで一度だってそんなこと、所謂告白な

んてされたことがない。『だつて悪い。

私はマサトがカワイイと口にする女の子のような、一般的な女子にはまるような格好も口調も仕種も、何もできない。

私とマサトはバンド仲間で、私の一番の喧嘩相手で。

「アリエナイ、脳みそ溶けちまつたんじゃねーの」

「はあ……いいよ。今はそれで」

「 つた

視線を下げたマサトを不思議に思つて見つめていたら、マサトが顔をあげたのと同時にでこピンをくらつた。意外に痛いんだ、これ。

「今日は、悪かつたよ。やめるなんていうな、caronのボーカルはお前だけなんだから」

痛くて顔をしかめる私を見て、マサトは久しぶりに笑つた。

その笑顔に、いつものマサトに戻つたのか、と少しだけ泣きそうになつたことは、悔しいから絶対に教えてやらない。

= END =

「ねえ、ジュンタ」

「なあに、カヅキ」

しゃべりかけて、また口を閉じる。最近のカヅキはそういうおかしな態度ばかりだ。原因は、わかっているけれど。でもだから、ちょっといじじめてやりたくなるんだ。

「また、マサトのこと?」

そう、耳元でささやいてみる。できるだけ唇を近づけて。最近カヅキは髪を染めた。以前は綺麗な黒髪だったのだが、少し青くなっている。腰を覆うほど長く、きつちりそろえられた毛先。ライブの時だけつける、真っ白なエクステが、俺は好き。今日もついている。俺はそれを、指先ですくう。

もともと同じ学校の軽音部から始まつた俺たちは、先輩たちのため、今田四月一十八日、毎年恒例の卒業ライブで、学校近くのスタジオを貸切にした。

今は長机や椅子を並べて、ライブ中なのに打ち上げ状態だ。飲み食いがメインなのか、演奏を聞くのがメインなのか、わかりやしない。

卒業ライブとはいつも、要するに部活から引退するだけで、完全に音楽から離れる人もいればもつと本格的にやろうって人もいる。だから、こんなのは騒ぎたいがための口実に過ぎないのだ。

会場のはしご上で傍観していたカヅキを見つけて、先輩たちから

うまく逃れてとなりに座つたのはほんの五分前。
すでにジュークで酔つているらしい。

雰囲気に、というべきか。

カヅキは一度上目遣いに俺を見上げると、また視線を落とした。

「アイツ、よくわかんない……」

ぶすっと口をとがらせるカヅキの姿に、俺はくすぐすと控えめに笑う。

「またケンカ?」

「今度のはちょっとちがう」

「ビニラくんが

「……こつもの三割増しつてカンジ」

それじゃ大したことないな、カヅキの髪に指を通しながら、横目でマサトの姿を探した。またアヤノ先輩に捕まつてる。すごい形相で俺のことを睨みつけながら。

やだやだ、嫉妬つて。

そう思いながらも、俺はカヅキに近づく。形のいい小さな頭を包むように手をまわす。そうしてまた耳元へ唇を寄せる。

「アヤノ先輩、まだマサトにござつこんだねえ」

俺がそういうと、カヅキはがくとつんだれた。三割増しは嘘じやないらしい。

「……なんかね」

一度困ったように視線を床で泳がせ、コーラが半分くらい入った紙コップの中身を一気に飲み干した。ここに酒飲ませたら、悪酔いしそうだな、と思つ。

「話すなって、特にジュンタとは。半径五メートル以内に近づけるなとかいつてんだよ、バカみたい」

「へえ、じゃあ駄目じやん。逃げとかなくていいの？」

「別に、意味ないし。いちいちアイツのこいつとなんて聞いてらんないよ」

バカにしたようなその言い方に、マサトも氣の毒だなど、苦笑いを浮かべた。

でもカヅキに限つて、誰かのいつたことを素直に聞いて、まして実行するなんて到底思えない。それがカヅキが正しいと判断することでの限り、あり得ないのだ。

この一年間、一緒に演奏して、唄つて、ステージで同じスポットライトを浴びてきた、俺たちはそれをよく知つてゐる。

「男はみんな狼なんだーとかいつてんの？」

「そりゃ、ホント、バカみたい……」

「でも、あんまり無防備にしてると、俺だつて襲つかもよ~」

俺がちょっと動けば、キスができるへりこ近い。

やわらかそうな白い肌。ふっくらしてつるおにのある箇。

マサトはもう、触れたのだろうか。

「へ、やれるもんなりやつてみな

相変わらずだ、俺はやつぱり苦笑いする。

カヅキは誰かと付き合っていたって、全然変わらない。たまに女になるけど、いや、女にさせるけど、それでもたとえばファッショントカ、（もともとカヅキとマサトの趣味は似てるけど）付き合いが悪くなったりとか、そういうことはない。デート（つまり一人で出かけること）に誘えれば今だって、遠慮することなく付き合ってくれる。

まあ、そこがマサトにはおもしろくないんだね。

とりあえず、まだ殴られてはいない。

「おー入さん、飲んでるかーい」

三月でまだまだ寒いはずなのに、半袖の白いTシャツを着た男が近づいてきた。ネルシャツを腰に巻いて、下は着古したジーパン。片手に紙コップと、ペットボトルが二、三本。

「シユンじゃん、ちよつといい。なんかジュークちょーだい。炭酸じゃなーの」

カヅキは空になった紙コップを差し出して、早くつげといわんばかりにぐりっと円を描きながらコップを回していく。

「あー、オレンジしかねーよ?」

さすがはうちの歌姫だ。

すっかりいいなりのショーン（カヅキがいうには、昔からやつらし）は、ゴトンと持っていたペットボトルを置くと、ミリーボールとスポットライトくらいしか光源がなくて薄暗い中、目を細めてラベルを読んでいる。

「それでいいよ。さつさとついで」

「へいへい。つたく、ジュンタは？」

「ミシヤサイダー飲みたい」

「あ、残念！ 売り切れでーすっ」

「んだよ、じゃあ同じでいいよ」

ステージでは今、三組目のバンドにバトンタッチしているところらしい。内輪のライブだけあって、楽屋は未使用。演奏者もフロアから上がるつていう適当さ。

「いつちや悪いけど、本番はまだまだだ。」

うちの部活は大所帯だけに、当たり外れが激しい。実力のある奴とない奴の差が、それほどはっきりしている。

今日の主役、先輩たちで構成されたバンドは全部で四組あって、当たりはそのうちの一組だけ。いつちや悪いが、それ以外なら俺らの方が実力は上だと思う。

ちなみに今も匡人を放さないアヤノ先輩は、我等が部長だつたりする。ベーシスト、なかなかの腕前。入りたての頃は結構世話をなつた。

「つまんねーなあ」

がたんとでかい音を立ててショーンが俺の隣のパイプ椅子に腰をおろした。

「ああ、つまんねえ」

「あ、あれおいしそう」

「どれ？」

「ジユンタの田の前にあるヤツ、バターしょりゅう？」新商品じゅん

「あー、はいよ

「あんがと」

カヅキは満足そうにスナック菓子の袋を抱える。一人で食べるらしい。他の女の子だったら体重がどうのとかいつて気にするところだが、そういうばカヅキはそういうことを気にしている素振りを見せたことがない。

「んー、つまつ」

「あ、ついに来たぜ、本命」

アヤノ先輩たちがステージに上がった。まともに田に向けると、ステージってのは結構眩しい。

「　　いい声だなあ」

「ギターも最高」

「は、ドリームは俺のほづがうめーな」

「バーカ、自意識過剰ってんだよ、それ」

「シュンがナルシイなのは今に始まつたことじやないし」

「うっせ、事実だからって負け惜しみいつてんじやねー」

「負け惜しみじやねーし」

あははと三人ともが声を上げて笑つた。居心地のいい空間。いい音楽。

「おいつ、黒髪少年！」

「お、マサトじゅーん」

後ろから怒鳴つている訳ではないが最大限まで低めた声に殺氣めいた気配を感じた。振り向くと睨まれた。そいつの出現に対し、シンが陽気に応える。

「少年つて、俺か？」

「カヅキに触んな」

アヤノ先輩が出番でようやく解放され、俺に文句をいいにこんで

きたと。まつたぐ、らし、よ。その余裕のなさ加減。
睨みつけるマサトの目を見ながら、俺はやつぱりくすくと笑つ
た。

「カヅキも、ジュンタは駄目だつてーのー。」

「つむいー、イイじゃん別に」

「よくねえつ」

「嫉妬する男はみにくこよーん」

「シユンは黙つてろー。」

シユンはにやにやと笑いながら一応口を閉じた。カヅキはイラつ
いているらしく、じつちもじつちです」とい形相でマサトのことを睨
みつけてくる。

気がついたら口喧嘩の始まり。

「んでおめーはこいつ」と聞かねんだよつ

「んであたしがあんたのこいつ」と聞かなきゃいけないんだよ

「お前は俺のだろー。」

「何バカいってんの？ マジウゼー」

束縛したがるマサト。といつより、カヅキがそういうことに疎す
きて心配なんだろう。わからぬもない。

微笑ましく思つて、二人の言い合ひ姿を見ながら、少し羨ましく

なつた。

「かわいーねえ。ショーンくん、そつ思わない?」

「うふうふ、かわいーねえ」

うひの歌姫はかわいい顔をしてこるが口は悪い。白い肌、赤い唇。

「えつ」

「ああつー。」

ショーンがひゅうつと口笛を吹いた。思った通りやわらかいカヅキの頬。

「もお、こきなり何よ」

動じないカヅキ。それに対してもサトはどこつたら、言葉もないといった様でパクパクと口を開けている。

ああ、この一人、おもしろいよなあ。

「俺も彼女作るつかね」

殴られないうちに、逃げておいつ。ショーンの襟を掴んで、眩しいステージへ向かつた。

==END==

たとえばそれは、誰かのタメだったのかもしれない。

熱気のせいか、さつきまで卒業ライブで貸し切っていたスタジオは少しだけ息苦しかった。

先程からのマサトとの言い合いでもうござつして、ウザッたくて、逃げ出した。アヤノ先輩が来てちょうどマサトを捕まえてくれたおかげで、誰もついてはこなかつた。

誰もいない楽屋がいくつか並ぶ狭い廊下、少し暗い照明が照らし出す。既にラストライブは終わつた、後は飲んだり食べたりの宴会だ、興味ない。

それよりも、だ。誰かが唄つてゐる。控え目なギターを奏でながら。

キレイな声だ、こんな奴今まで知らなかつたな。惹かれるままに音がもれる一室を覗いた。元からきちんと閉まつていなかつたドアの隙間から、バレねえだろうな、なんて少しどキドキした。

キレイな声、メロディはどうか落ち着いたやさしさに響き、なんだ、アイツか。

ドキドキする心臓でリズムを取る、それからアイツが唄い終わるまで、私は楽屋の外でその曲に耳をすませていた。

夢を見たんだ 人形の
ぼくらはいつしか 見えなくなる
その前にひとつ 話し掛けてやらないうか
いつだつて 待つてんだ
はちきれそうな孤独抱えて

さあ騒^{ノイ}いづぜ 月が満ちるまで
ぼくらは いつだつて 夢みがち
あの子にも おすそ分け
目を閉じたら 噎いだすから

少し泣いて 自転車とばそう
風が強い 景色が吹つ飛んでく
弾けとんだ 水分子
置いてつた 声も
今あるものを 抱き締めてやれ

さあ騒^{ノイ}いづぜ この夜が明けるまで
ぼくらは いつだつて 夢みがち
待つてんだつて
目を閉じたら 噎いだすから
ほら 待つてんだつて
あの子にも おすそ分け
目を閉じて 噎いだすから

ぼくらは いつだつてそつ
いつだつて 噎つてゐる

ひしめきあう ガラクタ

忘れられた人形劇

終わる前に ひとつ

変わったこと

わからないまま

いつまでも 待つて

いる

壊れない

「お前、やつこいつのこつ考えるワケ?」

「電車ん中」

「はあ? いつも俺とダベってんじゃん!」

「そんな重要なコト話してたっけ?」

あつけらかんと、カヅキはいった。これっぽけも悪いこと思つてないみたいにいうから、毒氣を抜かれちまう。

「んだよ、ひでえな」

「もう、シユンはいいから。で、感想は?」

それなりに広いスタジオの端っこで、小さく円になつている俺ら。一見したら何やってんだつて感じだけど、今はカヅキが新曲を披露中。だから、一応真面目にやつてるワケ。一応。

俺たちの中で、だいたいの役割分担は決まってる。たとえば曲作つたり、詞を書いたり、ライブを取り付けたり、だ。けど、最近はみんな関係なく曲を作つてくる。

元々作曲は俺とジユンタで代わる代わる、もちろん相談しながら二人で作つたりもしてた。今はとにかく、曲を作る人つていう境界線が曖昧過ぎてる。

もちろん、全ての曲が使われてるワケじゃねえし、まだまだ作曲が不慣れな俺等はすぐに何曲と作れるワケもなく、常に試行錯誤だ

から自作の曲がやたら多いなんてコトもない。

詞にメロディをつけるにしろ、メロディに詞をつけるにしろ、人前でそれなりに演奏できるくらいに仕上げるのはなかなかムズカシイ。不向きなのかもしれない、と何度も思ったか。その度に知識や経験不足だからなんだと言い聞かせてきた。

そういえば、そんな中でも詞をつけるのは、カヅキだけだった。

「イイと思つたぞ、」

「なんか、らしいよ。 caromっぽい」

「なんだそれ」

俺も特にいうことはないので、とりあえず黙つてみる。

文句をつけたところで作れないしな。詞ばかりは。なんか、恥ずかしさに加えて、どうやって詞を書くのかわからねえんだ。何を詞にするのか、思い付きもしない。カヅキが気に入らなきや、容赦なく却下されるだろ？

「……コースケ？」

今回もいつも通り、このまま練習かなあと思つていたら、カヅキが思いつき眉を寄せてコースケを睨んでいた。

そういえば、今日はずっとだんまりだ。今も、目がものすごく泳いでいる気がする。でもそれもすぐに真下に向いちまつたから、わからなくなつた。

「あ……『めん、』

「『めんつて、聞いてなかつたワケ？』

あーあ、カヅキが怒ってる。そりゃそうだよな。

「コースケえ？　お前、どうしたの？」

俺はこいつそり下から覗き込むようにコースケの顔を見た。それで
も顔がよく見えない。どうしたんだ、マジで。
つーか、いつも俺に『ちやんと聞いてるよなー』って怒る立場
のくせに。

「悪い、いや、違うんだ、聞いてなかつたとかじやなくて、違うん
だ。カヅキ……」

コースケは両手で頭を抱え出した。すっげーため息だな。どうし
たんだ、真面目眼鏡のくせに、妙にしんみりしちやつて。

「いいよ、イヤなら、こつてくれればいい

「だからやつこいつをじやないつて、その、」

「さつわとこえよ」

おつとおつとおつとつと？

もしやコースケさん恋の予感？　妙に顔が赤いんですけど。
でもなあ、かわいそうだけど、カヅキはマサトっていうか、マサ
トがカヅキだからなあ。あと、ジユンタも怪しいし。この間ほつペ
にちゅうしてたし。波乱じやん、コースケ！　なになに、修羅場？
つか、カヅキにモテ期到来？　まあ、俺はそんなんに流されねえ
ケド。

「つぐ、興奮するー！」

「……黙れよ、シユン」

「あもいぞ……」

「吐け、コースケ！ なにがあった！」

「つべつべつべー、マジ興奮するー。人の恋路はどうしても
楽しいかね。」

「……シユン、顔にいろいろ書いてあるんだ」

「むづじゅんがやん！ 僕ビビる顔してくる？」

「すりげー楽しそう」

「あらひ、両たつてゐる。そつこむじゅんタも、若干楽しそうだけ
どね。」

「ホント、なんでもない。今回の曲もよかつたんじゃねえの。ただ
ちょっと、良すぎて酔つたつづーか……とにかく！ 聞いてなかつ
た訳じゃない」

「なに……それ」

カヅキは目を丸くして、コースケを見ている。いや、俺たちみんな、
びっくりしてコースケ見てるんだけど。

コースケがこんなに自分の感情 音楽のことで 出したの、
初めてかもしれない。眞面目なまとめ役の眼鏡くんは、いつだって

損な役回りで怒つてばっか。

きっと人生の八割を他人のコトで余計な心配とかして、苦労するタイプつつののが俺とマサトの一一致した見解。まあ、外れちゃないと思づ。

「やめる、見るなお前ら。全員文句なしだろ？ 次のときまでに自分のところのアレンジまでやつとけよ。ほら、やるぞ、練習」

ひとりコースケは円から外れ、自分のギターを引っ張る。真っ赤なギター。

こいつそりカヅキの顔を見ると、ほんのり頬が赤かった。どんな風に褒めたって絶対に照れないカヅキがこんなに揺れてるのは、多分、あれだ。

こいつことひでは唄うのが一番だつてこと。

今度はこいつそりマサトの顔を見る。こいつあは対照的に、青い。真つ青。カヅキの顔を凝視してゐるや。

「こりや、一波乱あるのかね。

「あれ、やううぜ」

どうやら我らがリーダーは、恋愛事に疎いらしい。とはいっても、カヅキの次だけビ。

「いいなあ、やるか

「久しぶり」

「ちょ、待て、コースケ。じっくり話したいことが

」

「あと。お金払ってんだから。せむつつけたらせむ。わいつひと用意
しな」

まあ、どうなつたつていいんだけど。
そんなん俺らは壊れたりしないから。
そんなんで壊れるなんて、俺がさせない。

「シヨン、合図」

唄い続ける限り、俺らはつながりしているから。

=END=

メロディメイカー

たまに、考えてしまつ。

俺は、ここにいていいのか。いる意味、あるのか。

そうやつて自問自答して、しゃべるのが怖くなるんだ。ギターを持つ手が、ふるえるときだってある。

俺のポジションって、他の誰でも代えがきくんじゃねえかつて。そう思つと、怖いんだ。

「新しいの、できた、ケド」

上邨桂月。ボーカル、たまにキー・ボード。

「お、カヅキちゃん仕事はつやーいつ

賀庄峻一。ドラム。盛り上げ役。

「へえ……今回の中曲、誰だつたっけ？」

时任潤。ベース。寄寄せ。

「そーいや、新曲作るなんて聞いてねーぞ」

遠山匡人。ギター。アレンジ好き。

「俺がいったんだ、そろそろなんか作らないかって。今回はカヅキがやつたのか？」

そして俺、中尾雄亮。ギター。

「まあ……そんなとこ。どうある?」

「どうあるって、そりゃやつぱ聞くつしょ! なあ、コースケ?」

ショーンが嬉しそうに笑う。こいつはホント、好きだよなあ、音楽が。俺は曖昧に、返事をした。ああとか、うんとか、肯定に聞こえるだろう返事。

確かに、カヅキにそろそろ作りたいよなつていったのは俺だ。でもそれはただの願望で、作るつていつものようにみんなで決めたわけじゃない。だから、俺も誰が曲つけたのかはさっぱりわからない。まあ、詞がカヅキであることは確かだ。

「じゃあ、とりあえずカヅキ、よろしく」

ジュンタがにこりと笑いかけた。それを不機嫌そうに見ているマサト。今は練習中だから一応自制しているようだが、醜い嫉妬心は充分見えていた。ため息。

「じゃあ、うん。唄うね。あ、ギター貸して」

はい、と差し出された手。俺はその手に、戸惑つ。カヅキは新曲を唄う時、なぜかギターを手にする。多分、こいつの場合はキーボードを出すのが面倒なのだ。いつも大して使っていないので、ケースに入った状態の方が多い、大抵は部室に置きっぱなしだ。今回のスタジオ練習でも、使わないといったから持ってきていないようだ。

もうこうひづじゅうもないワケでのギター、こつもはマサトに借りているが、今回はなぜか、その手が俺に向かっていた。

驚いた、が、特に拒否する理由もない。多分、興味。俺のギターを触つてみたいとでも思つてゐるのだろう。

深い意味なんて、あるわけないんだ。俺はカヅキにギターを渡す。赤い、赤いギター。

「じゃあ、唄うよ

細い指が、弦の上で泳ぐ。

少し、たどたどしく、コードを押される。流れ出す、メロディー。

「　　」

心臓が止まるかと思った。実際、三秒くらいは止まっていたかもしれない。

心臓に氷でも触れたみたいに、本当に、それくらいびびった。メロディーが聞こえてから、カヅキが唄つてから。これは俺が、いつか捨てた。

その後は、取り繕うのが大変だった。

恥ずかしさで体温は上がりっぱなしだし、シュンは変な誤解しやがるし、マサトはマサトで

「違うよなっ、違うよなー?」とかいつてがたがた身体を揺さぶつてくるし、ホント、死ぬかと思つた。

まさか、あんなところでカヅキに喧嘩は売れない。問い合わせられない、本当のことなんて、あいつらに教えられない。

熱くて熱くて、汗までかいて、シャツがべたりと身体に張り付いてくる。でも、不思議と居心地悪さは感じなかつた。頭がまだ、ぐるぐるしやがる。

「カヅキ、」

一通りの練習を終えて、スタジオから出た。みんなで駅へ向かう途中、後ろの方を歩いていたカヅキにひそり声をかける。

「なに」

「お前、見てただろ」

「うん、見た。ついでに聞いた」

ため息。カヅキがさりげなく出した手には、いつも使つてゐる小型のレコード。塾の授業を録音してこいと、親が買つたらしい。カヅキが本当に使つてゐるのかは不明だが。やつぱり、こいつには敵はない。

「コースケ、いい声してゐよね、やつぱ。今度チョンジしようよ」

あたしがギターであんたがボーカル。

そういうて指差しながら、カヅキが笑つた。こいつは、とんだ女だ。

「遠慮するよ。あれはもう、お前んだ」

少しだけアレンジされた、俺の曲。カヅキが唄いやすいメロディ

に、詩に変えたのだろう。それは、俺が当初創ったものより断然良くなっていた。後でそれをいふと、創れば慣れるものだといわれた。

「ちげーよ、caromのだ」

だって、みんないっていってたし。うちらの曲でしょ。
無意識にそういうてるなら、やっぱりお前はすげー女だよ。
ちょっと、泣きそうになつたじやんか。

「ねえホント、今度ボーカルやってよ。もっかい聞きてーもん

いつも、怖かつたんだ。

俺には音楽の才能なんてない。

でも、あいつらは違うんだ。なにかが、違うんだ、決定的に。な
のになんで、俺はここにいるのかって。

代えのきく俺が、どうしてバンドなんかやってんだりつつて。

別に、俺たちはプロを田指してるつもりなんてない。

でも、やっぱり少しほ夢を見てる。この道で、一生。

浅はかだつて、わかつてんだ。

だから、怖いんだ。

いつ、いらないつていわれるか、俺は、怖かつたんだ。

「……それも、おもしろいかもな

ただ、音楽が好き。

今はそれで、それだけで、ここにいるには充分な理由。

＝END＝

マーク

その反抗的な目を、真っ直ぐ見返せないのがイヤだった。最初は、最初の理由は、きっとそれだけだった。たつた、それだけだったんだ。

「カヅキ、ここの中、おかしくないか?」

「イヤ、いんだってこれで。ここは外れる方が響く」「そ? 違和感ない?」

「イヤ、一回通してみればわかるから。ね、マサ」

「あ? あ、ああ……」

「じつしたのー? まーっとこちやつてわあ

わざわざ腰を屈め、シユンが俺の顔を覗き込んできた。いきなりのドアシップに

「うわ、「驚いて一歩ひいた。

「なんだよ、俺傷つべーー」

シユンは眉を寄せ、唇をとがらせた。俺より五センチくらい背が高いくせに、しかも男のくせに、背中を丸めて上目遣い。そんで確実にわざとだ。

でもそこがシユンの憎めないとひるで、なんでも女の子には『力ワイヤ』と、ウケてこむらしこ。でも、俺は特にイイ気持ちはない

い。男だし、当たり前か。

「まあ、とつあえず一回やるか」

はあ、と大げさに息を吐きながらコースケが仕切る。ぱらぱらと楽器を手にとりて、お互の顔を見ながら円になるように立った。雨のせいか、今日はやたらとテンションが低い。

軽音部の練習場所、いわゆる部室棟はみんなそうなのだが、いつもいる校舎からは離れた位置にある。おかげで楽器は濡れるし、この間つからカヅキとコースケはやたらと仲良くなつてゐるし、なんかもう、イタイ。

それでも練習はやるケド。

マイクスタンドをカヅキがその両手で掴む。みんながシウンへ田配せず。シウンは、カヅキを見る。

カツ・カツ・カツ・ダッダダン！

スネアドラムが鳴いた、ギター、ベース、カヅキがシャウトする。すべてが気持ちよ過ぎるほどにぴたりと揃つて、音は走り出した。

その唄い方、お前はどうで覚えてきたんだ？

乱暴な感じがするのに、勢いまかせで走つてゐるような気がするのに、どこかで繋がつてゐる。それはひとつ曲だからか？ 楽譜にはこんなこと書いてない。

同じ曲を作り上げてんだって、実感する。

ああ、だけど 息切れしそうなんだ。

「 つ、いた」

「マサト？」

なんだってんだ畜生。今日は何もかもうまく行く気がしねえ。

「弦切れたっ」

「あ、ホントだー。だいじょーぶ?」

ただ、切れただけだ。そういうえば、張り替えるの忘れてたな。もう一ヶ月は経つてたかも。今さら思い出したつておせえんだよ、と自分に向かって毒づく。

イライラした気持ちを抑えるように息を吐ぐ。右の手の平に、痛みとは違う、何かが違つのような感覚がした。

「あ、」

「血? って、マサト、大丈夫か?」

なんで血が、そう思つて昨日の授業中に、誤つて刃の出たカツタ一を思いっきり握つてしまつたことを思い出した。ここ最近、ぼうつとしていると何度もわれただろう。弦が切れたときに、ちょうど傷口を刺激したのだろう。

それは小さい傷の割りには深く、流れ出した血はなかなか止まらなかつた。一時間くらい抑えてやつと止めたのに、またこれでしばらく血が止まらないんだろうか。

「ばーか」

「せひ」

いつも通りにカヅキは冷たい。

別にやさしくしてもらおうなんて思つたことはない、期待なんてしてゐわけがない。

俺も俺でいつものよつとつけんどんな返事をする。その後、カヅキが俺の視界から消えた。正確には、どこかへ歩いていつただけだが。

「はあ、マジ悪い。止めちまつて」

「別にイイけど、お前が弦切るところしぶりに見たな。中学以来じやん?」

「自分の楽器くらい自分で管理しろよな」

背後からカヅキの声。いつの間に、振り返つたらまた、あの真つ直ぐな目で睨まれた。俺が悪い、カヅキのいつてることは正論。だから田を逸らしちまつ。思わず、だ。

「手、」

「は?」

突然の単語に、俺は間抜けな返事を返す。一瞬なんのことだかわからなくて、それが体の『手』だと気付くために、次のカヅキの言葉が必要だった。

「手、出せつひとつてんの」

訳のわからないまま、いわれた通りにカヅキが顎をしゃくつて示した右手を出した。小さい傷口と、それに見合わない量の血。結構流れてんな、そう思つたらふわりと覆つた淡い黄色のハンカチ。

「ちよ、これつ」

「うひせい、黙つてゐ」

端と端が俺の手の甲で結ばれて、俺は右手を解放された。

「ユースケ、あれや。今日の練習は中断

「え、でもあれは、」

「いいよもう。どうせこいつのギターダメだもん。チエンジ。マサトはそここのケースの、ショッキングなピンクのギター使え。弾けんだろう？」ユースケ、貸して

どうせ010の方があんたは好きでしょ、指差した先には俺たちがここに来る前から部室に置き去りにされていた誰のかわからないギターケース。

まさか、これはカヅキのギターなのか？

「……ユースケ、ボーカルなの？」

ジュンタの声がして、はつとしてみんながいる方を振り返った。カヅキがユースケのギターを持って、マイクスタンドの前にはユースケ。

「マサト、早く

ジュンタの質問に、ユースケは苦笑いで答えた。カヅキが俺を急かす。しうがなくギターケースの中のショッキングなピンクのギ

ターを取り出した。ホント、すげー色だ。

「いい? いつも通り、ラーカをやつてくれりやいいから、」

「え、なんでコースケなの? つてかカカヅキ弾けんの?」

シュンが驚いている。いや、俺もジュンタも驚いてるケド。円になつて、マイクを掴んだコースケ。それは、やっぱ妙だ。これはおかしい。

「ぶつつけ本番よリマシだら?」

「まあ……つてコースケそれ本番でやるつもつだつたの!」

我らがリーダーらしからぬ発言だ。そんな一步間違つたらすべてを崩しかねないような行動。コースケは苦笑いを浮かべるだけで答えない。

「いいから、シュン、合図」

みんなが口を噤む。いいや、とりあえず今は自分に『えられた役目だけを考えよう。俺はギターを、ジュンタはベースを、シュンはドラムを。

カヅキと田を合わせた。真つ直ぐ、真つ直ぐ向かつてくる。

乾いたステイックの音が耳に入つてくる。深く息を吸い込んだ。

あとは右手が、吐き出してくれる。

|| E N D ||

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1351d/>

carom

2011年1月16日14時32分発行